

第2章 竹の歴史

1 日本人と竹

古来、日本人の身近にあった竹は、平安初期に出来た我が国最古の物語である「竹取物語」に、「野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使いけり」とあるように、その軽くて丈夫で、かつ通直といった優れた性質は、日常生活に用いる民具や工芸品、民家等、日本の風土生活に根付き、広く活用されてきました。

尺八や笛といった雅楽器の材料にも竹が使われてきましたが、室町時代になると、茶道や華道の文化が興るなかで、日本特有の文化である「わび」、「さび」を演出する重要な素材として竹の道具が使われ、茶室や日本庭園には竹を取り入れた独特の建築様式が生み出されました。

また、早くから竹に強い生命力を見だし、それに神霊が宿っているとする信仰とともに、日本人の心性と溶け合い、伝統芸能と民族行事等、精神土壌の中にしっかりと根を下ろしていました。正月の門松、地鎮祭の四隅に立てる竹、葬式に欠かせない青竹、七夕の竹など、こうした例には枚挙にいとまがありません。

しかしながら、明治維新による西洋思想と技術の導入に伴い、伝統的な竹文化は徐々に失われていき、特に1960年代降の燃料革命と、戦後の重化学工業を主産業とした経済復興により、竹は急速に人々の生活文化における存在感を失ってしまいました。しかし、その一方で、日本人と竹との長い歴史の中で、日本の文化において竹が果たしてきた役割の大きさについては異論のないところと言えます。

2 えひめの竹の歴史

本県における竹の利用の歴史は、推古4年（596年）聖徳太子が道後來浴の折、付近一帯に広がる竹林を見て、住民に竹材の組編みを教えたのが始まりと言い伝えられています。

また、平安時代には、久万地方特産でありササの一種であるスダレヨシの茎を編んで作った「伊予簾^{いよすだれ}」が都で使われていたことが、源氏物語、枕草子、今昔物語の記述に見られます。

時代は移り、戦前・戦後にかけては、日用品、台所用品、農林水産業用資材に至るまで竹加工品が大半を占めるとともに、優れた竹工芸品も創作され、特に竹の花器の生産高は全国一を誇っていました。このほか、大洲市の竹の熊手^{くまで}は全国生産量の大半を占め、またタケノコ生産では西日本有数の生産地であるなど、竹に関わる諸産業は有力な地場産業の一つでした。



伊 予 簾

竹林の大部分を占めるモウソウチクについては、本県では、今から約200年前の江戸